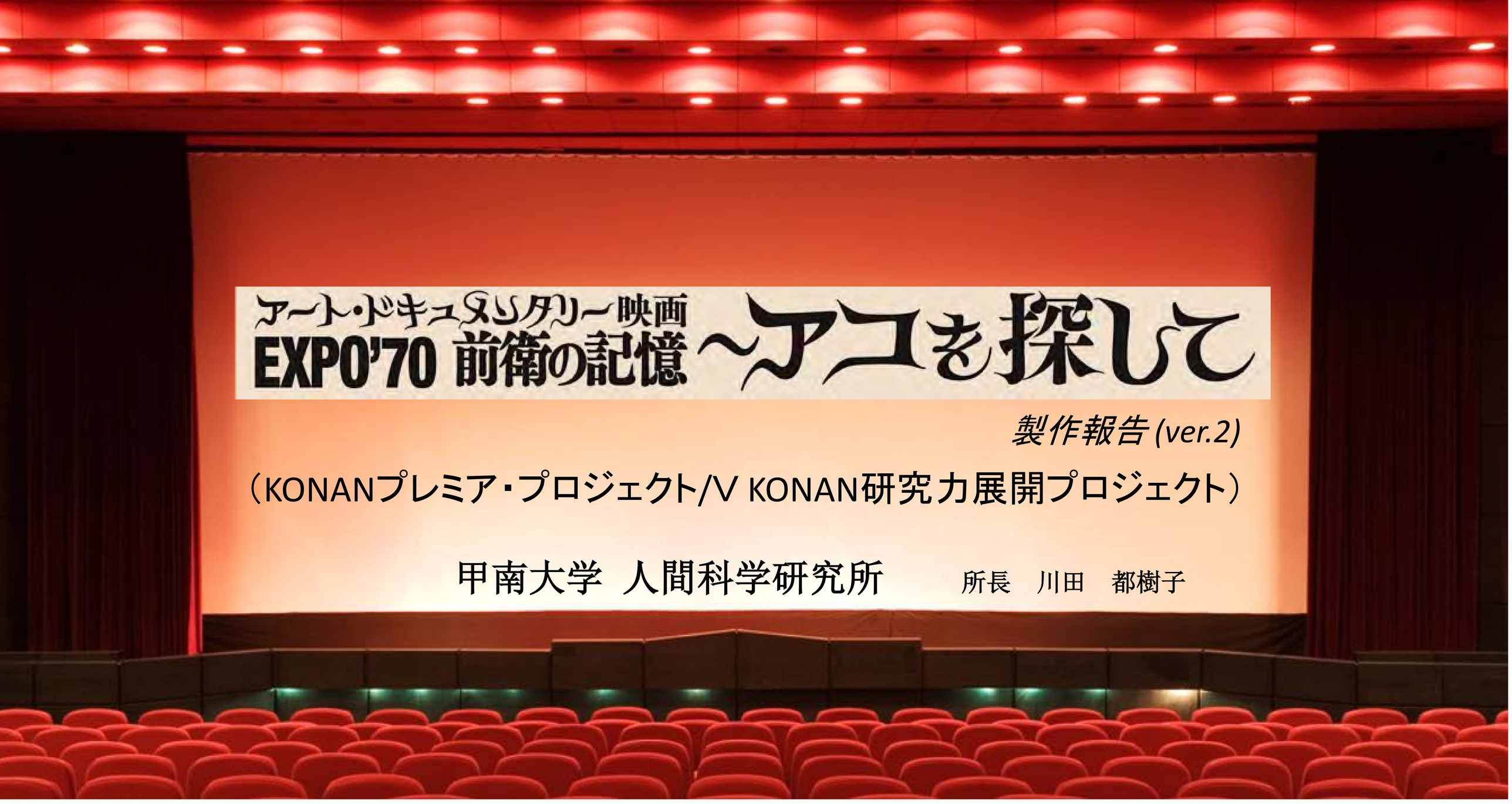
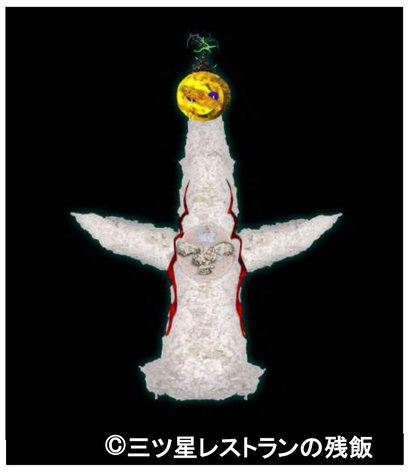


製作報告 (ver.2)

（KONANプレミア・プロジェクト/V KONAN研究力展開プロジェクト）

甲南大学 人間科学研究所　　所長　川田　都樹子

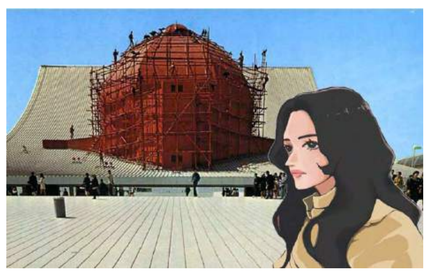


EXPO'70

出　演：甲南大学 学部生／メインキャスト：5名
　　（基礎共通教育科目「芸術史」受講生：20名）
監　督：寺嶋真里（映像作家）
完成予定：2024年 夏
上映予定：2025年大阪・関西万博 /関西パビリオン

OSAKA.KANSAI.JAPAN EXPO 2025

映画のあらすじ



EXPO' 70の「せんい館」 と "アコ"のイメージ
背景画像提供：木の情報発信基地

「甲南大学の授業でEXPO'70 を調査研究するプロジェクトが始まった。」
そのプロジェクトに参加した甲南大生の"アコ"が、EXPO'70の「アコ」を探す物語。

EXPO'70（1970年の大阪万博）には「せんい館」というパビリオンがあった。
そこで、松本俊夫監督の映像作品「スペース・プロジェクション・アコ」が公開されたという。
「アコ」とは、当時20歳のヒロインの名前だった。

現代を生きる甲南大生の"アコ"とその仲間たちは、
・授業で、プロジェクトチームに加わり、研究調査を重ねながら、
・専門の研究者の講演を聞いたり、討論会に参加したり、
・当時を知る人をたずねてインタビューしたり、
・様々な当時の文献や映像資料を探索・閲覧・調査しながら、
皆で協力しあって、EXPO'70 とその時代について徐々に深く知っていく。

現代の甲南大学生"アコ"と仲間たち

やがて、"アコ"は1970年に生きる自分の姿を妄想しはじめ、幻の中で、ついに1970年の「アコ」と出逢う。
その幻想に仲間たちも次々に感染していき、そのまま皆が、EXPO'70 の狂騒の時代にタイムスリップ !?

1970年、大阪万博の熱気の中で、あの頃の日本人が抱いた「未来」への希望…。
「あの頃」にとっての「未来」を「今」として生きていた"アコ"たちは、
「あの頃の夢」を"我がこと"として受けとめて、これからを生きていかなければならない。
彼らは、この調査・研究プロジェクトの中で、何を知り、何を見出していくのだろうか。

「アート・ドキュメンタリー映画 EXPO'70 前衛の記憶 ～アコを探して」製作報告

（KONANプレミア・プロジェクト/V KONAN研究力展開プロジェクト）

甲南大学　人間科学研究所　　所長　川田　都樹子

「アート・ドキュメンタリー映画」製作プロジェクトの背景

★ EXPO2025 大阪・関西万博に向けて、EXPO'70 大阪万博の成果を振り返ろう

2025年日本国際博覧会（EXPO2025 大阪・関西万博）の開催に際し、これに先立つ1970年の大阪万博（EXPO'70）を振り返り、その時代と思想、その意義と成果を再検証し、それらを現在へと引継ぎ、未来へと繋いでいくことが必要でしょう。

★当時を知らない学生たちによる、EXPO'70 大阪万博の調査・研究

画像：https://acworks.co.jp/（Photo AC）

1970年の大阪万博（EXPO'70）は「人類の進歩と調和」をメインテーマとし、アジアで初めて開催された国際博覧会でした。それはまた、原爆投下による終戦から25年を経た敗戦国ニッポンでの万博であり、米ソ冷戦のさなかにあって、「恒久平和への希求」とともに、決して楽観的な進歩思想ではなく、実は、今でいう「ダイバーシティ」（多様なもの同士の「調和」）の理念をも先取りしていました。

EXPO'70の真の理念とその時代の日本や世界の状況について、甲南大学の学生が自ら体験的・積極的に研究・調査することで、当時を知らないからこその新たな視点や様々な気づきが生まれていきます。

★「最先端テクノロジー」と「前衛芸術の祭典」でもあった、EXPO'70 大阪万博

原子力発電、携帯電話、電気自動車、リニアモーターカー、エアドーム建築など、今日の日常を形づくっている技術が初登場したのも EXPO'70でした。また、様々なメディアの間を横断する「インターメディア」というべき芸術活動が爆発的に展開・噴出し、そこに当時の先端テクノロジーが導入され、まさに国家的レベルの文化事業として多くの前衛芸術が発表されたのでした。特に複数の映写機をコンピューターで一括制御して大音響と共に「マルチスクリーン」に映し出すタイプの作品が数多く発表され、注目を集めました。

（例）「みどり館」の「アストロラマ」

ドーム形の半球の内部はすべてがスクリーン。5 台の映写機から 5本のフィルムを同時に映写する仕組みによって全視野映像を実現した。

画像/https://www.flickr.com/photos/k_oota/5799126706/
制作者：©kouji OOTA、Flickrより

★EXPO'70 大阪万博を経験した世代、参加した前衛芸術家たち

甲南大学の教職員や名誉教授、同窓OBには、EXPO'70にまつわる懐かしい思い出をお持ちの方も多く、そうした先輩方との交流の機会を得て学生は多くを学んでいきます。

甲南の近くに横尾忠則現代美術館がありますが、前衛芸術家の 横尾忠則（1936- ）は、EXPO'70 の「せんい館」の設計者です。その大きなドームの内部には横尾制作の巨大な女性像の部分彫刻群が取り付けられ、それらも含め全体が映像スクリーンになっていたそうです。そのロビーには、芸術家 四谷シモンの人形「ルネ・マグリットの男」が 15体も設置されていました。そのうちの1体は、現在、大阪大学中之島センターに設置されています。

横尾忠則　設計の「せんい館」

具体美術まつりでの気球で宙を飛ぶパフォーマンスのイメージ

また、EXPO'70に協力参画した前衛芸術家集団「具体美術協会（1954-1972）」は、甲南大学からほど近い芦屋を拠点としていました。その作品や史料は、芦屋市美術博物館や兵庫県立美術館、大阪中之島美術館、国立国際美術館等々で見ることができます。

「せんい館」ドーム内部　と　四谷シモン「ルネ・マグリットの男」

上：「せんい館」画像/木の情報発信基地より　　下2つ：写真/遠藤正

★「せんい館」で前衛映像を発表した松本俊夫監督、その弟子の寺嶋真里監督

寺嶋真里

Photo: Yoshitaro Inami

松本俊夫

「せんい館」の総合プロデュースは、日本の前衛映画を牽引した松本俊夫監督（1932-2017）。松本俊夫の映像作品「スペース・プロジェクション・アコ」は、ドーム内と壁面全体に投影されました。10台の大型映写機、10台のスライド、８トラックのシネコーダー、ドーム内の周囲の壁、天井、床面などに埋め込まれた50個以上のスピーカー、全てがコンピューターで制御され観客を圧倒しました。主演の「アコ」はオーディションで約300人から選ばれた、当時20歳の女性でした。

一方、私たちの映画製作プロジェクトで監督を務めるのは、松本俊夫の弟子として活躍中の映像作家, 寺嶋真里（1965-　）です。数々の国際映画祭にも招待上映されてきた、アヴァンギャルド&アンダーグランド映像の実力派アーティストのひとりです。

日本では、EXPO'70を頂点として、アヴァンギャルドもアンダーグランドも衰退したとしばしば言われてきました。しかし、松本俊夫の精神を受け継ぎ今日に伝える映像芸術も確かに存在しています。そのことをも作品で証明したいと考えています。

人間科学研究所 映画製作プロジェクト の 概要（報告と計画）

★ 監督：寺嶋真里、出演：甲南大学生。芸術映画の製作を

Photo:Hitoshi Iwakiri

人間科学研究所では「KONANプレミア・プロジェクト/V KONAN研究力展開プロジェクト」として、新作映画の製作を、映像作家,寺嶋真里に委託しました。本プロジェクトは、この映画製作と、学生のEXPO'70に関する学び（調査・研究）とを連動させる試みです。

松本作品の主人公「アコ」を「探す」という比喩表現によって寺嶋監督が描き出そうとするのは、現代の甲南大学の学生たちが、1970年という時代、その思潮や世相を探索していく姿です。

映画の出演者（キャスト）は甲南大学の学生、メインのロケ地は岡本キャンパス。

映画完成予定は2024年夏。EXPO2025（大阪・関西万博）会場での上映も予定されています。

★ 甲南大学 全学共通科目「芸術史」との連動

2023年度の全学部共通科目「芸術史」（前期開講）の授業を映画製作の場と一体化することを試みました（科目担当教員：川田都樹子、森茂起、友田義行、吉川孝、森年恵）。 受講生を組織して班をいくつか作り、「前衛芸術の祭典」でもあったEXPO' 70とその時代について学生たちがグループで調査・研究し、その成果を授業内で順次発表し意見交換していきました。

担当教員らも分担でこのテーマについて講義を行いました。さらに、専門の研究者をゲスト講師として招き、授業内で講演会・討論会を開催、もちろん受講生も常に討論に参加しました。

それら全ての授業風景を動画として記録し続けました。この記録動画のすべてを「素材」としつつ、さらに寺嶋真里監督が学外での追加撮影と加工や編集を施し、1本のアート・ドキュメンタリー映画に仕上げていきます。（※ 受講生と教員とゲスト講師、その全員と「肖像権に関する同意書」を交わしています。）

EXPO'70の「ソ連館」のパンフレットを囲んで
語り合っている学生研究グループ

★ 貴重な「時代の証人」からの声をあつめる

EXPO'70の関係者は、生きている人もすでにかなりのご高齢になっています。インタビューによってその生の言葉を記録し、後世に伝えること自体、大きな歴史的価値が生じるものだと言えるでしょう。

インタビュー風景

観客として、あるいはアルバイトやスタッフとして、EXPO'70を実際に経験した方々へのインタビューを、学生や科目担当教員が自分で撮影し授業の中で発表しました。これらも寺嶋監督が映画の中に編みこんでいきます。（※ 全員と「肖像権に関する同意書」を交わしています。）

学外では、当時EXPO'70に参加した美術家で元具体美術協会会員の今井祝雄、美術評論家・キュレーターの室井絵里、実験映画のジャンルで重要な映像作家である中島崇、居田伊佐雄、映像と身体表現の万城目純、美術家のマンタムらのインタビューを撮影、当時の貴重な証言を収録することができました。

さらに今後は、もしも可能であれば、 EXPO'70に参与した著名アーティストたちへのインタビューを引き続き行っていきたいと願っています。

今井祝雄

室井絵里

中島崇

居田伊佐雄

万城目純

マンタム

★ 実力派アングラアーティストたちのコラボでハイクオリティーな映像を

三ツ星レストランの残飯

アングラで超絶個性派・キッチュで珍妙なアニメ作品を作り続け、コアなファンより支持を得ているアニメ作家“三ツ星レストランの残飯”が、本作のアニメパートを担当しています。

また、アートなセンスと確かな技術力を持つ写真家の岩切等と、映像クリエイターの大川晃弘が本作主要部分の撮影を担当します。

ただの記録映像ではなく「アート・ドキュメンタリー」と称するゆえんです。

岩切等

大川晃弘

★ 映像（予告編）公開の記録と、完成作品の上映予定

予告編

※ 2023年12月1日（金）：「甲南映画祭」（文学部主催）で「予告編」を初公開。
トーク・イベントでゲストの兵庫県 斎藤元彦知事 と 出演学生の代表３名が、
EXPO2025 と EXPO'70について語り合い、神戸新聞、サンテレビでも取り上げられました

https://youtu.be/KTXssQQnegg?si=f63NSUGiA0g05btK

※ 寺嶋真里監督による映画作品の完成は、2024年夏頃。学内で「上映会」を開催予定。
2024年度の夏と秋のオープン・キャンパスでも上映会を開催。
2024年の冬の「甲南映画祭」では、学内上映会と関係者のトークショーを行います。
（松本俊夫「スペース・プロジェクション・アコ（1970）」記録映像との2本立を構想中）
その他、学外施設での上映会も決まり次第、大学ＨＰ と Ｘ(Twitter)でお知らせします。

※ 2025年 大阪･関西万博での上映が決定！関西パビリオン兵庫県棟での上映です。
詳細は、これも決まり次第、ＨＰとＸ(Twitter)でお知らせします。

甲南大学人間科学研究所_ART
@rnjinkxuyn25170 (Twitter)

製作・撮影の様子 と 注目ポイント

X（Twitter）では授業や映画撮影の様子を写真で紹介しています。

★現代を象徴する「マルチカメラ」の試み

「芸術史」の授業の様子は、常時3台の固定カメラと、撮影スタッフ（学生アシスタント）による手回しカメラ1台と、さらに担当教員のノートパソコンのZoom記録によって動画撮影されました。

また、**受講学生全員が、それぞれのスマホで、自分の視点から思い思いに授業風景を動画撮影し**、それを寺嶋監督に送っています。寺嶋監督が、それを編集して映画作品に組み込んでいきます。

同時共存する多数の視点による「マルチカメラ」、おそらく映画史上初の試みです。スマホやSNSに代表される現代、誰もが端末を携帯し常時情報を共有できる**この時代のメディア環境を象徴**的に表現する、寺嶋真里監督ならではの実験的試みです。

EXPO'70の多くのパビリオンでは、当時の最先端テクノロジーを駆使した新しい映像表現が発表されました。中でも複数の映写機をコンピューター制御で一斉稼働させて映す「**マルチスクリーン**」が目を引きました。現代においてそれに呼応するもの、つまり、最新のテクノロジーの在り方を象徴するものこそが「**マルチカメラ**」である、と私たちは考えています。

★ 学生による授業内での研究発表と考察

共通教育科目「芸術史」の受講生は、班に分かれ、それぞれが次のようなテーマでの調査・研究・発表を行いました。「**岡本太郎と太陽の塔**」「**せんい館と松本俊夫・横尾忠則・四谷シモン**」「**みどり館のアストロラマ**（マルチスクリーン）」「**アメリカ館とソ連館（2025年万博へのロシア参加の可否）**」「**万博反対派―アンチ万博の芸術家たちと学生紛争**」「**コンパニオンの制服と1970年頃のファッション、ヴィジュアル・カルチャー**」。それらの動画記録も寺嶋映画の素材です。

また授業後に学生が書いたコメントや期末レポート等も（本人了承のもとで）映画の素材として公開します。

寺嶋監督による個々の学生へのインタビューも学内に仮設された撮影スタジオで収録されました。

学生たちが何を学び、何を考え、どこに向かおうとしているのか、学生たちの「学び」が見えてくることでしょう。

★「70年代ファッション」で踊る「ゴーゴー」

70年代ファッションの学生たち

メインキャストの学生の衣装は、サイケデリックな色柄やミニスカート、チューリップハット、ベルボトムのパンツ、ロンドンブーツ、ヒッピースタイル等々、すべて**1970年ごろに流行していたファッション**です。往年の「ナウなヤング」に扮した学生が、当時流行した「**ゴーゴーダンス**」に挑戦しました。プロのダンサーが作ってくれた「お手本動画」を参照しながら、プロバンドの演奏にのって、サイケデリックに点滅するライティングのもとで学生たちが乱舞します。

ゴーゴーに挑戦 （大学のギャラリーにて）

学生たちの70年代イメージをサポートしたのは「平成生まれの昭和女、歌って踊るゴーゴーガール」の**“踊るミエ”**。70年代カルチャーを体現するこの稀有なアーティストが、楽曲提供、ゴーゴーダンス出演から衣装提供・スタイリング監修までこなしています。彼女の**バックダンサー“クリーマーズ！”**と、クールでゴージャスなエレキバンド**“ザ・ジャック・ポッツ”**、そして昭和を愛するアーティスト仲間、**“斉藤ネヲンサイン”**、**“ダイヤ・ピアノ・サンタ”**らも協力してくれています。彼らの「モーレッツ！」な熱風をぜひご堪能下さい。

奥左：**斉藤ネヲンサイン**、奥中央：**“踊るミエ“**、
奥右：**ダイヤ・ピアノ・サンタ。**
手前：**“クリーマーズ！“**/左：**ライム　右：エマ**
Photo:Hitoshi Iwakiri

★ 松本俊夫（映画監督）へのオマージュや、丹下健三（建築家）らのメタボリズムへの言及

EXPO'70の「せんい館」で総合プロデュースを勤め、マルチスクリーン作品「**スペース・プロジェクション・アコ**」を発表した映画監督の**松本俊夫**（1932-2017）は、日本を代表する実験映像作家・前衛映画監督の一人として、わが国の前衛芸術を牽引していったアーティストでした。私たちの映画の監督 **寺嶋真里**は、その松本俊夫の弟子にあたる映像作家ですから、映画「アコを探して」には、故松本俊夫監督への様々なオマージュが散りばめられているかと思います。それを発見するのも、**コアな映画ファンにとっては醍醐味**となることでしょう。

「芸術史」の授業では、戦後映像芸術アーカイブ（PJMIA）の阪本裕文氏から供与いただいて、“幻の名作”である松本俊夫「スペース・プロジェクション・アコ」を鑑賞することもできました。「アコを探して」が完成し公開できる時には、もしかすると松本作品の「アコ」と２本立での同時上映が叶うかもしれません。現在、その計画を進めております。乞うご期待！

他にもEXPO'70の前衛的な芸術表現への言及は様々なレベルで私たちの映画の中に隠されています。例えば、太陽の塔の周りにあった大屋根は、建築家の**丹下健三**(1913-2005）が考案した未来都市のプロトタイプで「**メタボリズム**（新陳代謝）」により**無限増殖**しうる、ユニットの集合体でした。現代人にとって、この無限増殖のイメージは**スマホやSNSのメディア環境にむしろ近いでしょう**。本作の「**マルチカメラ**」はその表れでもあるのです。

太陽の塔と大屋根　画像/木の情報発信基地より